

は、不幸が非常に重ツてあつたのだ（拙者は病の爲め歸國する所で……郷里では大火があつて、然も拙者の家は風下七軒目で丸焼け、大切な参考物等も皆火に喰われたのだ）其の不幸も忘れてる事が出来てあつたのだ！他の乗客を見たら、例の秋田婆さんは餘程苦すへと見へて、向ふ「ハツマキ」……若へ「デモ紳士」風の人は、顔色を青くして、「スタエ」を押へ／＼して……、其の脇きの若い美人（奥さん風）はネムソーな目をして「コバルト」の呼吸をしてる、拙者の向ふの學生帽の青年は何やらの雑誌を見ながら（讀んでるのか單に本に目を向けてるのか）ネムタソーな「アクビ」幾回も／＼してあつた、拙者はこんな人の様を見てこゝ思ふたのだ。

「今此等の人に、イサ、カでも洋畫趣味を平常持つて居たならば、かゝる場合見苦しい「アクビ」等をせなくとも面白く楽しく乗つて居らるゝものを」……と……、拙者の身の上をも忘れて、此等の人々が氣の毒に見えたのである。

拙者は其れから「スケツチ」もやり、車外の景色も楽しく見た……、やがて小暗らき時に驛夫の聲で下車した、出向いには親父と弟が来てあつた。（完）

飾り氣のない面白い文章であるから、東北地方の言葉遣ひはわざと其儘にして置きました（編者）

『みづゑ』に希望

石川縣小松町 湯 浅 生

『みづゑ』の發展と内容の向上されたるを喜祝す。

繪畫既に美術なり——水彩畫は繪畫なり——『みづゑ』は水彩畫同好者の絶大指南車なり——此見地よりしてプライスは多少エルヒヨヘンされても僕は原色版、色彩石版のより多からんことを希望す。

僕由來風景畫を殊に愛好し、近くは六拾六號大下先生の「しけ」藤嶋先生の「代官阪」前號の「夏の山村」前々號の石井先生の「鴨川」等最垂涎して喜悦す。

僕矢張六拾六號に『みづゑ』の親友君の御説の如く、大下先生の紅葉せし雜木林、極めて遠き遠山の繪具の遣ひ分け等、或は旅行中得られ給ひしスケツチ原色版を掲出ありて、其描き方の色彩の順序、乃至一種氣骨ある寫生には油繪筆の剛き筆毛が適當、及び其方法など御掲載多からんを賛成、否な御願ひして止まず。

或時は山嶽號、或時は海岸號等の名稱の下に、先生の美敷風光の原色版多き年二回位ひ臨時増刊の御發行は如何尾瀬沼號の如くに。

田舎の村から

松 本 白 也

私は及ばずながらも水彩畫嗜好者でもあり、研究してみたい決

心も燃えて居るんです、けれども、無論田舎の事でもありませんが、登つて行く手蔓も全く無いと言つてもよい位なのですから、徒に中國山脈のもつその底みたやふな所で、美しく買つた東都の畫界を羨望して居るのみです。

先年、京都へ行つた時に買ひ求めたカーキ色の畫囊を携へて、濃厚なるグリーンの幕に包まれ、趣の深く印せられた里道を通る時はたゞ酔つた様な憧れを持つて見入られてしまふのです、緑に對照した黄色の大きな畫囊、白い麥稈帽子、是等は道行く人々に遇ふ時は何んとも言ふ事の出来ない誇りが胸に浮びます、其濁つたセピア色の淺果敢な誇り――

私は恚な誇を抱いて、全く向上の前途を想つて悲しくなつてならないのです、言ひ忘れましたが、私は言ふ事の出来ない暗い心を隠しました、常に悲哀が印せられつゝあるのです。

現時に於ける農家の悲惨、恚う言へばすぐ分る事でしやう、こんな中に生ひ立つた私は不幸者なのです、まあこんな虞痴はさて置いて、私が薄つぺらなスケッチ旅行の紀行文を書く事に致しましょう。

窓の外の梧桐の葉が濃厚なる毒々しきばかり茂りあつて、梅雨晴れに雨蛙が鳴き立て、清書して居る水車の畫が乾ないので困りきつて一息して居るのを、窓下に煙草の葉を延して居る庄助が見て居る、『庄助――今なあ、父さんの所へ行つて、二三日歸らんからさう言つてくれ』と頼んで、全く無意識に何處へか遊んでやらうと思つた。例の黄色の畫囊を横腋に抱へこんで出た、

高地の村を圍んだ中國山脈の偉大なる姿は、私の忘る事の出来ない深い印象なのです、薄いコバルトを少しくぼかした山頂は、常に柔かい白毛の筆の様な雲が接吻して柔かい勇々しい畫となつて居る、中國山地の特徴であるてしやう。

六月號にある大下先生の水彩畫の通りな岩の肌が露はれた山裾も此邊に多い、葛の葉が卷きついて小さい花葉が葉元に付いて居る。

花崗岩の河底なる流れは、水は清らかである、けれども底の河床は所々バアントシンの汚れた水垢が附着して、其淺瀬の波頭は、梅雨晴れの柔かい濡つぽい空氣へ心をそよのかす様な響きをする、三間幅の谷川、犬蓼の生茂つた岸風が吹く底に咲いたばかりの犬蓼の赤い小さい花瓣が散る。

薄墨色の水車の屋根がくつきりと浮かんで、分れた里道の水田街道を辿つた、此邊は常に畫版を携へて寫生しなれた處だけに色の具合も輪廓も手馴れて居る、私は此の地方は高地であるから、従つて濁つた色彩は割合に近景にあつて、遠くの山々のコバルトは純然と朦朧的である、雪を頂いた中國山脈は、春の中頃まで鮮に印象せられる、其雪山の色澤等の美は、全く中國特有の落付きのあるものと思ふ。

岩の岬々たる間に淵がある、お新淵大師靜沈みきつて、表面は新しい水が僅かばかり入り入かはるのみで、青葉陰に包まれた、深暗なるクリムゾンレーキの神秘を思はしめる。

山上生活の平凡なる楽しみに満足せる二十軒の農家、水田の山

梨と子供の時によく言つた僻地、勾配の急な草屋のなめらかしい煙の登る様、大古時代から子孫が連続と傳はつたのだらう。寫生しはじめた、灰色の鎮守の腐つた建物を中心にして、面白くないが遠景に農家と松の森繪具の不善なので、けばくして筆が延びない、午前十一時、草の靡いた形が出ない、木を切る音が聞える、仙化せられた人となつた、思はず一息に書き終つた。

日記の一節

鹿兒島 み い 坊

八月二十日午後より、永濱重範君と中名方面へ寫生に行た、僕はとある丘上に畫架を立て、漁村と林を前景にして櫻岳を寫して居たら、長い間後から見居た一人の農夫が「ソゲンシテサゲスム御取イヤットナ」と聞いた、何の事か僕にやさつぱり解らない、再三再四問ひ返したがわからぬ、僕はサゲスムと云ふのが解らんだ、僕は何も思はず、只さと答へたら「えー榮華いな」と云つて去つた、サゲスムと云ふのが氣になつて居たので、歸途に近所の爺やに聞いて見たら、何だ提げ寸と云ふ事で測量の事だつて、わかつておかしかつた、成程提げ寸と理ある事だわい。

八月二十九日、今日も又昨日の處へ出かけた、途中から「寫眞取がはら」と云つて。小供かわいわい云つて二三町ついて來た、

叱つても聞きやせぬ、夕刻約束の場所に出合つた永濱君の寫生中の奇問「そんなに書いて、歸つて寫眞に取つて賣るんぢやすか」と聞く者があつたつて、田舎ぢや寫眞が畫より餘程えらいんぢやなと大笑した。途中で僕等を氣ちがいが來たと云つたと云ふ噂を聞いた、開けぬ者つて滑稽なもんぢや。

九月一日、十號ひつ提げ竹藪に行いて書きかけたら、藪蚊の多い事にや閉口、足をはらへば脊中をやる、手は届かぬ、かゆさはかゆい、仕方がない、如何程熱中し居たとて之れにやたまらぬ、早々かへつた、夜中通してむしやくしてかゆくてかゆくて寝られなんだ。

九月二日、何程蚊が多いたつて、やりかけたのをやめる氣になれやしない、いろ／＼考へた末善い事を思ひついた、僕はきらいながら煙草を持つ事を、ほんとに善い法だ、其煙でか臭で知らぬが、時々やると蚊やなんぞそこらへ來もしない、大いに助かつた。小事だが僕にや大發明でもした様に嬉しかつた、そして非常に楽しく、今日はすごした、今夜はかゆかないが、明日の天氣とスケツチが氣になつてよう寝られない、夢でスケツチに行けば、夜も晝も書き通しぢやわい、明日も又好天氣を祈る。

予が退會の理由

昔の某會友

本誌八月號三六頁上段に

本誌は帳簿整理上如何に御懇意の方にてても前金に非ざれば發